

正しい絶望のすすめ

—浄土の教えに生きる—

西原 祐治

目次

はじめに 4

第一章 いまを生きる

ニヒリズムを突き抜けて 8 / 文明の発達と滅亡 13 / “やさしさ” という感受性 17
親鸞聖人からのいただきもの 21 / 生きる意味を考える動物 25
独りでいられる能力 31 / 普通という暴力 37
迷信を生む人間の特性——迷信バイアス 41
わたしの居場所——お仏壇から始まる生活 45

第二章 人生の抛りどころ

母乳語・離乳語と超越語 50 / 多様性を受け入れる 54
わたしが握りしめているもの 60 / 違いのなかで見出される生き方 64
不確かな物差し 68 / 「諦め」の強さとやさしさ 73
内発的動機づけの大切さ——アンダーマイニング効果 78
“頭が下がる世界”をもって生きる 83 / 悪人の自覚——自己奉仕バイアス 89
選択の自由とおまかせの自由 93

第三章 仏法という物差し

閉ざしたところを開く慈悲 98 / 諦める——明らかに見究める 102
豊かに願われて生きる 106 / 「南無阿弥陀仏」の名のり 112
「この世では覚れない」者の救い 117 / やすらぎと喜びの源——アミダ 120
覚れぬわたしであると覚る 124 / 大悲の源——願いとほたらき 129
救われなければならぬ存在 133 / 欠点を長所として見通す豊かさ 138

第四章 大地からの支えに応える

死別によって育まれる生 146 / 阿弥陀さまのまなざしのなかにあるわたし 151
浄土は恋しからず——現状維持バイアス 155 / 煩惱の重さに応じたはたらき 160
お浄土を知るヒント 166 / わたしの闇を明らかにする 169
変わることはない願いに貫かれる 173 / 「南無阿弥陀仏」というみ名のなかに 178
闇の深さと慈悲の深さ 182

おわりに 188

* 聖教の引用については、『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典(七祖篇)註釈版』は『註釈版聖典(七祖篇)』と略記しております。

はじめに

一九八七(昭和六十二年)八月から仲間とともに、築地本願寺(東京都中央区)で毎月一回「がん患者・家族語らいの会」(浄土真宗東京ビハーラ主催)を開催してきました。今も続いています。人はいのちの終わりにあつて、死の苦しみからどのように解放されていくのか。三十数年の活動のなかでもっとも大切にしてきたことです。

迫り来る「死」は、大きな力を持っています。それはわたしの生を否定する力です。死は「生」といういのちだけでなく、生き方・考え方も否定していきます。わたしたちは、プラス思考、希望を抛りどころとして生きています。この世での希望実現には時間が必要です。死は、その時間がなくなるときです。プラス思考で未来に向かって生きることそのものが成立しないのです。ここに、わたしの希望をベースにした生き方から、まったく質の違う生への転換が重要になってきます。浄土真宗で言えば、阿弥陀さまの願いに開かれた生き方への転換です。それはわたしの希望をベースにした生き方を断念するときでもあるのです。

苦しみの対象には二つあります。一つは「わたしの○○」の○○です。わたしの健康、わたしの家族、わたしの名誉といった具合です。これは他と比較できるのでわかり易く、ある程度はコントロールも可能です。もう一つは、「わたしの○○」ではなく、わたしそのものが苦しみの要因となることです。たとえば、思い通りになったことだけにしか喜びを見いだせない自分へのこだわりです。これは認識の主体なので、普段の生活では意識されません。多くは、苦しみの体験や自分を覚醒させる言葉との出会いによって明らかになってきます。

前者の苦しみ「わたしの○○」は、苦しみを減らしていくことも可能です。しかし、わたしそのものが問題となる状況下では、減らすのではなく、自分が握りしめているものを手放すことによって解決されていきます。人は苦しみを通して、自分を超えたより広やかなものに出遇うことができるのです。

本のタイトルにある「絶望」は、わたしが変容していくときにおこる内容を言葉にしたものです。

一般的にもちいる絶望は、歓迎しない状況です。希望への執着を断ち切ることができ

ずに苦しみのなかにある状態です。

しかし絶望とは望みを絶つと書くように、希望を断念して、希望への執着から自由になることでもあります。

浄土真宗の用語に「捨機しゅき即託法じつたくぽう」という言葉があります。機とはわたしのこと、法とは阿弥陀さまの願いとはたらきのことです。わたしを捨てるときが、そのまま阿弥陀仏の法にまかせることである、という意味です。わたしを捨てるとは、まさに希望を断念することであり、その絶望が、そのままより質の高い阿弥陀仏の世界に開かれる起点となるのです。

浄土真宗の仏道は、人類のすべての人が苦しみから解放されていく普遍的な考え方を持っています。苦しみを通して、苦しみの底に横たわっている自らの愚かさが明らかに、その愚かなわたしを救うという阿弥陀さまの慈しみに開かれていく。そのことを、だれにでもおとずれ苦しみの現場で実践する。これがわたしの思い描く浄土真宗の伝道です。

第一章 いまを生きる

愚かに迷い、心の乱れている人が
百年生きるよりは、
智慧があり思い静かな人が
一日生きるほうがすぐれている。

(中村元訳『ブツダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫二五頁)

近頃人気のロボット掃除機が、わが家でも活躍しています。先日、そのロボット掃除機が「エラー1 右」というメッセージを発して、動かなくなりました。ネットでヘルプ情報を読んで操作してみても改善しないので、サービスセンターにメールで問い合わせました。すると翌日、以下のような返信がありました。

「サービスセンターでございます。お問い合わせいただきまして、ありがとうございます。エラー1が発生しておられるとのこと、ご迷惑をおかけし申し訳ございません。すでにお試しいただいているかと存じますが、以下を、ご確認いただけますでしょうか。本体を裏面にいただき、後輪を五回ほど強めに叩いていただけますでしょうか。本体前面のバンパー部分を横から五回ほど、手で叩いていただけますでしょうか。(以下略)」

精密機器でも作動部分は簡単なパーツの組み合わせなので、アクシデントがあるようです。「五回ほど叩いてください」というのがクラシックで愉快です。仰せのとおりにしてみましたら、動き始めました。

一昔二昔前は、テレビの調子が悪いと「叩けば直る」と言って、バンバン叩く人がいました。しかし、現代のテレビなどの家電や精密機器は「叩いてはいけません」と注意書きにあります。

「叩けば直る」五十年くらい前までは、小中学校の教諭は子どもを叱るとき、叩くことがありました。社会に善悪の価値観がしっかりとあり、それによって体罰を認める風潮

があつたからです。先生が叩くという行為は教育的配慮とされていたのでしよう。現代はと言えば、価値観の多様化の時代です。ある人にとって善であることも、他の人にとっては善であるとは必ずしも言えません。

社会全体が共通の価値基準によって成立している時代は、見方によっては意外に生きやすい社会だと言えます。社会の基準に照らして、自分の立ち位置がはつきりとするからです。逆に、現代のように人によって価値観がバラバラな時代は、自分のなかに価値基準を持たないといけないので、ここから不安定な生き方が生み出されていきます。しかしこのように価値観の多様化といっても、体罰という一人ひとりの尊厳を損う行為は許されるものではありません。同様に現代ほど普遍的な価値や意味を見出し、生きる拠りどころが必要とされる時代はありません。

時代には、その時代の物語があります。たとえば、江戸時代には努力してもどうにもならないことが多くありました。職業の選択や立身出世など、自分の努力が報われない時代でした。むしろその時代の努力としては、欲をかかず “自分の分を守る” ことが求

められました。その後、明治、大正、昭和、そして戦後の高度成長期までは、“頑張れば何でも叶う” という時代でした。

ところが、昭和五十年前後のオイルショックを経てから、“がんばってもどうにもならないこともあるのではないか” という風潮になっていきます。たとえばマンガやドラマの傾向を見ても、それまでの「巨人の星」や「アタックNo.1」に見られる“根性モノ” から、このころを境に、“ひょうきんモノ” やトレンドイードラマなど、軽いタッチのものが流行るようになりました。

そして現代はと言えば、価値観の多様化のなかで共通の高い価値観が失われ、ニヒリズム（虚無主義）に陥っているようです。わたしは、このニヒリズムへの処方箋は、むしろニヒリズムを肯定して、そのニヒリズムを突き抜けていく方向にあると思っています。

ニヒリズムは、親鸞聖人の言葉で言うところ、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。

の症状であるということです。

清浄のころのないわたしを肯定してくれるものに「出遇っているか、いないか」がキーポイントになります。

光に充ちた一日は百年の闇の生活に勝ります。ニヒリズムを闇とするか、ニヒリズムのなかでニヒリズムを突き抜けて光に出遇っていくか、その光をインドの言葉で「アマミダ」(阿弥陀) ということです。

光に充ちた一日は、百年の闇の生活に勝る。

文明の発達と滅亡

如来、無蓋の大悲をもつて
三界を矜哀したまふ。

〔仏説無量寿経〕、『註釈版聖典』九頁

無蓋の大悲——いかなることに妨げられない無限の大慈悲心。

矜哀——矜も哀もともに「あわれむ」の意。如来の人々をあわれむ慈悲のこと。

人間と動物の決定的な違いは「言葉」を持つていることだと言われてきました。

言葉はいろいろな機能を備えています。言葉によって新しい現実がつけられていきます。「明日、映画に行こう」という約束によって、映画に行くという現実がつけられていきます。「大阪へ転勤を命ず」という命令も、大阪で勤務するという現実が言葉によって